No Border

巻／頭／言

今、生物物理若手の会主催の夏の学校に来ている。いつにも増して主催者の意気込がヒシヒシと伝わる。夏の学校って学生やポストでないとなかなか行く機会が無いと思うけど、もともと生物物理学会って夏の学校からスタートし、その後で年会を開く一人前(?)の学会になったと聞く。そういった意味では、今の夏の学校にも次の新しい流れを生み出す孵卵器としての役割もあるかもしれない^{*1}。今年のスピーカーは生物物理学だけでなく、計算機工学や応用数学などで活躍している研究者も多かった。そもそも今年のテーマはNo Border とのこと。これはまったく同感。学問の境界、そんなもの気にする必要なんて全然無い。ときどき「生物物理って大学に学科も無ければ、discipline としても確立していない」と自嘲気味の意見を聞く。実際、「生物物理学専攻」ってほとんど無くて、たいていの会員は生物化学や物理、化学系の専攻に所属している。そのため「標準的教科書が無い」という弊害はあって、それはそれでけっこう問題なんだけど^{*2}、学会自体の性質としては「それでイイじゃん」って思う。私を感じる生物物理学会の良さって、まさにこの「なんでもあり」なところである。私が生物物理に参加するようになってからも MEMS や非平衡物理の若手が参加するようになり、そのうち何人かは若手奨励賞を受賞して学会に定着している。研究領域の Border に対して鈍感というかおおらかなところが、この学会のダイナミズムを生み出す1つの原動力だろう。

自分の研究に関しても、研究分野の境界とか正直どーでもいい。おもしろいことをトコトンやるだけである。もちろんプロの学者としては「成果を挙げなきゃ！」なので安易には別領域に踏み込めないんだけど、No Border ってまさにずっと私の気分。先に言われちゃった感はあるけど、まっ良いか、いただいちゃおうこのフレーズ。

野地博行, Hiroyuki NOJI

東京大学工学研究科応用化学, 教授

*1 といっても彼らにはその自覚は無いだろうし必要も無いだけだね。

*2 「生物物理」Vol. 53 No. 3 高田さんの巻頭言を参照のこと。